

中国社会文化学会 2023年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会文化学会 Tel:03-5841-3746, 大会専用E-mail:shabun.taikai@gmail.com

参加費（シンポジウム資料代）1,000円

2023年7月8日（土）自由論題研究報告

第Ⅰ会場：14:00～15:40 2番大教室

司会：佐川 英治（東京大学）

王安石の理の思想 ……………田村 有見恵（東京都公立学校教員）

コメンテーター：伊東 貴之（国際日本文化研究センター）

日本中世禅林における送別詩偈 ……………李 華雨（東京大学大学院生）

コメンテーター：柳 幹康（東京大学）

第Ⅱ会場：13:00～15:30 1番大教室

司会：川島 真（東京大学）

言葉と銃——近代雲南のメディアとミリタリズム ……………董 子昂（北海道大学院生）

コメンテーター：中村 元哉（東京大学）

中華民国とアフガニスタンの国家間条約交渉（1924-1928）における新疆省政府の役割

……………松尾 健司（東京大学大学院生）

コメンテーター：吉澤誠一郎（東京大学）

20世紀初頭の内モンゴルと日本の交流——ハラチン右旗派遣のモンゴル人留学生を中心に

……………サラントヤ（東京大学博士課程単位取得退学）

コメンテーター：村田雄二郎（同志社大学）

会員総会：16:30～17:00 1番大教室

2023年7月9日（日）

シンポジウム 中国詩の動力と張力

共催：科研費基盤研究 A「国際協働による東アジア古典学の次世代展開——文学世界のフロンティアを
視点として」（研究代表者：齋藤 希史）

科研費基盤研究 C「魯迅作品日本語翻訳の総合的研究」（研究代表者：鈴木 将久）

1番大教室 10:00～16:30

モデレーター：齋藤 希史（東京大学）・鈴木 将久（東京大学）

趣旨説明：10:00～10:10

第一セッション〈核心〉：10:10～11:30

「天」と「神」と「風」と「水」と——中国詩における力の諸相 ……………浅見 洋二（大阪大学）

中国の外から中国の言語的近代について再考する ……………林 少陽（マカオ大学）

第二セッション〈境界〉：12:30～13:50

毛沢東——革命のカリスマと詩の力 ……………石川 禎浩（京都大学）

「詩の力」雑考——中国前近代の場合 ……………大木 康（東京大学）

第三セッション〈跳躍〉：14:00～15:20

中国詩の越境性とその根底にある力——漢字の視覚性と動態性の視点から……………遠藤 星希（法政大学）

二つの伝統と新詩の力 ……………佐藤 普美子（駒澤大学）

総合討論：15:30～16:30

◆自由論題研究報告 7月8日(土) 第I会場:14:00~15:40 2番大教室

◇王安石の理の思想

田村有見恵

〔報告要旨〕本発表は王安石の新学の共有を前提とする視点からの北宋思想史の再検討を目的とし、特に王安石の性命之理の説が士大夫に共有されていたことを検証する。『長編』では北宋初期から治平四年までに、人心と天心の相関を説く心の説、天譴災異説が隆盛する中で、王安石が実権を掌握していくとともに理の説が議論の基準とされるという大転換が起こったことが看取できる。

北宋の天、人、心、理に関しては先行研究の蓄積がある。しかしながら天人相関説の議論の中で王安石が多用する理の説、その説の同時代人への共有については多分に研究の余地が残されている。治平四年あたりから多用されはじめる王安石の理の説は、王安石の性命之理の学説の普及を意味すると考えられる。そのため本発表では心の説に対立する王安石の理の説に焦点を絞って考察する。この王安石の理の説とその学説の普及の検証は、北宋で性理学が興った一因を明らかにすることにもつながろう。

〔報告者紹介〕田村有見恵(たむら・ゆみえ)1982年生。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士(文学)。現在東京都立学校・教諭。主要論文「司馬光「心」学考—王安石「性命之理」学との対立から—」(早稲田大学大学院文学研究科博士論文、2020年)、「王安石の「一」の「性命之理」」(『日本儒教学会報』5,2021年)、「王安石・王雱の道德性命の思想」(『日本中国学会報』74,2022年)など。

◇日本中世禅林における送別詩偈

李華雨

〔報告要旨〕唐代以降、中国と日本の間では多くの人が海を渡って往来し、とりわけ僧侶たちの交流が盛んに行われてきた。異国の旅が終わった時、詩を嗜好する日中両国の僧侶の間では、別れの一つの重要な形式として送別詩偈が作られている。本報告では、主に『五山文学全集』、『五山文学新集』を取り上げ、成尋、俊苧を始め、各渡唐、宋僧の伝記、語録、禅詩選、抄物などの資料を利用し、日本中世禅林における送別詩偈を体系的に収集し整理した上で詳細な分析をし、日本中世禅林における送別詩偈の成立経緯と詩的風格の変化を中心に論じる。中国古典の送別詩からの影響と中国詩僧、例えば無学祖元、北磻居簡などの送別詩から受けた影響をそれぞれ考察し、送別詩を通じて日中詩僧の交流の歴史を明らかにし、日中文化、文学交流史の一側面を補うことを試みる。

〔報告者紹介〕李華雨(り・かう)、1994年生。専攻は東アジア書籍史。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。日本学術振興会特別研究員(DC1)。

◆自由論題研究報告 7月8日(土) 第II会場:13:00~15:30 1番大教室

◇言葉と銃——近代雲南のメディアとミリタリズム

董子昂

〔報告要旨〕本研究は、近代より前にあっては「革命の伝統が皆無」だと思われる中華世界の周縁である雲南が、近代になると一躍「軍省」となっていったプロセスを、思想と軍事の関連という側面から捉える。より具体的に、当時発行された新聞雑誌の読解を行い、雲南における近代軍事思想の受容と伝播、および「軍国民」と呼ばれる雲南人の国民資格の誕生について検討する。本研究を通じて、二つの問題を解明できると思われる。第一に、雲南留日学生が経験した「戦時体験」と、彼らが受けた軍事教育を検討することで、二十世紀初頭に明治日本が雲南の軍事思想に与えた影響を把握する。第二に、護国戦争前後の雲南軍事体制の強化と、「護国」世論の形成を検討することで、雲南の軍事行動の内在的動力を支えるミリタリズムとメディアの関係を考察する。

〔報告者紹介〕董子昂（とう・しこう）、1993年生。専攻は地域研究、メディア史。雲南大学人文学部卒。現在北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士課程在学。主要論文「世紀転換期における雲南の歴史再建：雑誌『雲南』とその増刊『滇粹』を中心に」（『国際広報メディア・観光学ジャーナル』30、2020年）など。

◇中華民国とアフガニスタンの国家間条約交渉（1924-1928）における新疆省政府の役割 松尾健司

〔報告要旨〕本報告は、中華民国（北京政府）とアフガニスタン（以下、略称を阿とする）が行った国家間条約交渉における新疆省政府の役割に着目することで、対外関係において見られる、辺境地域と北京政府の関係の一端を明らかにする。

漢人官僚楊增新統治下の新疆省政府は北京政府からの相対的な自立性が高かったにもかかわらず、新疆省政府が主導する対外交渉に北京政府が一定の関与を行っていたことが指摘されてきた。しかし、新疆が関わる案件について、北京政府外交部が窓口として交渉を主導する場合に、新疆省政府がどのような役割を果たしたのかに着目した研究は、両者の関係を照らし出すにもかかわらず、僅少である。さらに、その数少ない研究においても、新疆省で生起する事象への着目が薄い。そこで、従来その存在が知られていなかった1924年から1928年までの時期の中阿間条約交渉を例に、北京政府期外交部檔案を用いることで、新疆省政府と北京政府の関係を検討する。

〔報告者紹介〕松尾健司（まつお・けんじ）、1994年生。専攻は中国近現代史、国際関係史。東京大学法学部卒。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻国際関係論コース博士課程在学。日本学術振興会特別研究員（DC1）。主要論文『新疆省政府の対外関係：アフガニスタンへの対応を中心に（1919-1928）』東京大学大学院総合文化研究科修士論文、2022年。

◇20世紀初頭の内モンゴルと日本の交流——ハラチン右旗派遣のモンゴル人留学生を中心に サラントヤ

〔報告要旨〕本報告では、1906年に内モンゴル・ジョスト盟・ハラチン右旗・旗王のグンサンノルブ（以下グン王と略す）の派遣によって来日した五人の男子学生を取り上げ、彼らの来日までの経緯及び日本での留学先や学習生活について実証的に検討したい。

20世紀初頭において内モンゴル東部地域は満洲と隣接していることで、地理的に重要な意義があった。特に、義和団事件のあと、東アジアをめぐる日本とロシアの利害対立が表面化し、両国とも、内モンゴルのそうした地理的意義に注目しはじめた。日本は、借款及び訪日などの画策を試み、内モンゴル王公に接近し、親日感情を芽生えさせたことは本報告で扱う生徒たちの留日に繋がった。従来の研究においても、モンゴル人学生の渡日が注目されてきたものの、利用できる資料が分散的であったため、彼らの留学経緯の全貌が解明されていなかった。そこで、本報告では、当時留学事業に直接関わった鳥居龍蔵から大隈重信に宛てた留学派遣をめぐる書簡や1905年にグン王の依頼を受け、ハラチン右旗に鉱山調査を行った帝国大学の町田咲吉氏の残した『喀喇沁王府見聞録』など、従来の研究であまり注目されなかった日本側の文献資料を用いて、彼らの来日経緯を追及し、その経緯から読み取れるグン王の留学生派遣の目的及び、日本側の対内モンゴル工作の実態に注目したい。

〔報告者紹介〕サラントヤ、専攻は近代モンゴル政治思想史。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。現在博士論文を執筆中です。主要論文「1920年代における内モンゴル近代知識人の文化活動に関する一考察：蒙文書社を中心に」（『アジア研究』12、2017）、「五族共和とモンゴルの行方—民国初期の内モンゴル・エリートの言説をめぐって—」（フスレ編：『東アジアの秩序の再編における日本とモンゴル』、UdamSoyol 出版社、2014）など。

シンポジウム
中国詩の動力と張力

2023年7月9日(日) 10:00~16:30 1番大教室

企画の趣旨

詩三百から現代詩まで、詩型や時代の如何を問わず、脈々と書き継がれてきた詩を指して、ひとまず中国詩と呼ぶ。もとより、“悠久の歴史を有する中国文学”を夢想してではない。東アジア、さらには世界の文学としてそれらの詩群をとらえる視野を私たちはすでに得ている。その上であえて中国詩と呼ぶ試みによって、詩が書き継がれ読み継がれてきた時空の意味をとらえなおし、それを成り立たせてきた力、それが発揮してきた力を探りたい。力は権力であり、また対抗力であり、個や集団の生命力である。輻輳する力のダイナミズムに目を凝らせば、詩と中国の新たなすがたが浮かび上がる。

時代は古代から現代にまで及ぶ。中国詩は文化であり政治である。当然ながら、話題は多面にわたらざるを得ない。そこで、本シンポジウムでは、齋藤希史、鈴木将久の両名がモデレーターとなり、浅見洋二、石川禎浩、遠藤星希、大木康、佐藤普美子、林少陽の各氏に以下のセッションごとにお二人ずつ登壇いただき、それを受けて全員による総合討論を行うことで、多面にわたる議論を有機的に行えるようにしたい。

- | | |
|-------------|------------|
| 第一セッション〈核心〉 | 浅見洋二×林少陽 |
| 第二セッション〈境界〉 | 石川禎浩×大木康 |
| 第三セッション〈跳躍〉 | 遠藤星希×佐藤普美子 |

〈核心〉のセッションでは、凝集されたことばを生む力、あるいはそれが生む力が詩のコアにあることを起点とし、〈境界〉のセッションでは、政治と社会、そして文化の緊張の中で、詩が詩人たちのものだけではなかったことに目を向け、〈跳躍〉のセッションでは、時空と深く結ばれながら生まれた詩が、それを超えて享受され再生されることから展望を拓くことを企図しているが、あくまで仮のコンセプトとプランに過ぎず、登壇者それぞれの関心と知見を共有することをすべてに優先したい。

報告要旨

午前の部：第一セッション〈核心〉

「天」と「神」と「風」と「水」と——中国詩における力の諸相

浅見洋二（大阪大学）

詩はいかなる力をもつのか。古くから中国の文人たちは、直接に見たり触れたりにはできないが、すぐれた詩には何らかの力がそなわっていると考えてきた。例えば、詩を読む者を「感動」させる力。だが、それが揺り動かすのは独り読者だけではない。広く「天地」をも揺り動かす。そして、時として中国文人は、そこに超人的な「鬼神」の力を感じ取っていた。

では、かかる詩の力は何によってもたらされるのか。詩における力の源泉はどこに求められていたのだろうか。我々の多くは、詩人＝作者こそが詩に力をもたらすと考えるかもしれないが、あくまでもそれは源泉のひとつであるに過ぎない。中国の文人たちは、むしろ詩人の制御を超えたところで奔放かつ自在に働く力にこそ、詩にそなわる真の力のあらわれを見ようとしたと思われるが、それはいったいどのようなものであったのだろうか。

前近代中国において、詩と詩人の力をめぐって重ねられてきたさまざまな詩学的思考の軌跡——本報告では、その一端をたどってみたい。

中国の外から中国の言語的近代について再考する

林少陽（マカオ大学）

本発表ではグローバル・ヒストリーの視点から、近代ヨーロッパにおけるキリスト教の歴史の問題、キリスト教（会）の近代的変遷と国家・ネーション形成との連動が中国近代に与えた影響を扱ったうえで、白話文運動を含む近代中国の歴史を捉えなおしてみたい。近代中国のネーション・ステートやナショナリズムの形成、近代的中国の政党の登場などを含む中国の近代は、16世紀にスタートしたキリスト教の宗教改革から始まった西洋の近代に強く影響された。キリスト教（会）的近代的な変遷と国家形成・ネーション形成との連動こそが、東アジアにおける「国語」などの言語的近代の歴史起源にあったものである。本稿では広い意味での「宗教」の視点においても、白話文という言語的近代の問題を含む中国近代を捉えてみたい。

第二セッション〈境界〉

毛沢東——革命のカリスマと詩の力

石川禎浩（京都大学）

毛沢東のカリスマ性が、その革命家・政治指導者としての偉業と威望に由来することは論を俟たない。だが、かれが体現した文のありよう、わけでも書と詩詞によって、それが比類のない高みにまで押し上げられたことには、改めて目を向けてもよいだろう。まだ謎の人物だったころの作「沁園春 雪」において、すでに毛は、中華の山河を我がものにせんとした始皇帝ら歴代の皇帝たちを数え上げながら、「文」に見るべきなしとかれらを一喝していた。おのれの文才への自負を隠そうともしないこのデビュー作を見れば、かれは詩作が持つ力に早くから極めて自覚的だったと言ってよいだろう。中国共産党の指導者にとって、あるいは中国を支配するものにとって、詩詞は何を托し、何を与えてくれるものだったのか。生涯に80首ほどの作品を残した毛沢東、およびかれの同志たちの旧詩創作を手がかりにして、政治や革命のありようと詩文の持つ力のかかわりを読み解く。

「詩の力」雑考——中国前近代の場合 大木康（東京大学）

中国、とりわけ前近代における、詩（韻文）の持つ力と機能について、本報告では、以下の諸点について考えてみたい。（一）詩そのものが持つ力。例えば『水滸伝』のような白話小説において、散文の叙述の中に挿入される詩、詞等の韻文の機能について。（二）詩が士大夫知識人の生活において持つ力。前近代の中国において、はたして近代的な意味における「詩人」が存在したかどうか。「詩礼伝家」というように、詩が作れることは、士大夫知識人であることの最低必要条件であって、その意味では、逆にみんなが詩人であったともいえる。北宋中期から清代前期までの長い期間行われなかったものの、科挙の試験科目にも作詩は含まれていた。そしてなによりも、詩は士大夫知識人の社交の道具として重要な機能を果たしていた。（三）王権、政治権力と詩歌の関係について、勅撰集のあり方を中心に、日本の場合と比較して考えてみたい。報告者の関心から、明清時代の例が中心になろう。

第三セッション〈跳躍〉

中国詩の越境性とその根底にある力——漢字の視覚性と動態性の視点から 遠藤星希（法政大学）

アーネスト・フェノロサ（1853-1908年）が、晩年に中国詩と漢字、および能に強い関心を示し、まとまった草稿を遺したことは、よく知られている。その没後、妻のメアリは関連する遺稿を、当時イギリスにいた詩人のエズラ・パウンド（1885-1972年）に託し、整理を依頼した。パウンドはそれを読んで感銘を受け、遺稿のうち、中国詩と漢字に関する部分を編集して世に問うた。それが、『詩の媒体としての漢字考』である。

フェノロサとパウンドの興味をとりわけ引いたのは、漢字のもつ視覚性と動態性であった。音声記号である西洋の文字表記とは異なり、具象的で表意性をもつ漢字は、「詩の媒体」にふさわしい文字として、彼らの眼に映ったのである。中国詩との出会いは、パウンドがヴォーティシズム、イマジズムの理念を生み出す契機の一つになったとみなされている。

その後も、漢字の視覚イメージは、しばしば前衛芸術の創作に取り入れられてきた。詩の分野では、新国誠一（1925-1977年）の具体詩や、陳黎（1954-）の視覚詩などが、その代表例として挙げられる。では、前近代の中国の詩人たちは、漢字の視覚性や動態性をどこまで意識して詩作を行っていたのであろうか。本報告では、唐詩の実例を通してこの問題を検証することで、中国の旧詩に秘められた新たな可能性の一端を示したい。

二つの伝統と新詩の力

佐藤普美子（駒澤大学）

中国新詩は20世紀初頭に思想運動の一環として誕生し、胡適が掲げる〈反旧詩〉と〈明白易懂〉の理念は詩の作者/読者層および題材を一気に拡大させた。しかし古典詩のような固有の形式を持たない新詩が広く享受されるためにはさらなる芸術上の模索と年月が必要になるだろう。ただ文革終息後1980年代の「朦朧詩」は詩のことばとは多義的であり、思惟の方式そのものであることを知らしめ、新詩が持つ力を強く印象付けた。

本報告はその源流となる1930年代半ばの北平詩壇における“晩唐詩ブーム”の言語観に注目する。当時、フランス象徴主義やT・S・エリオットなどの西洋詩学に啓発された文学者たちは、散文言語とは異なる詩的言語の特性を再認識し、美学者朱光潜は詩の閲読がもたらす美感の観点から晩唐詩の〈晦澁難解〉な語と〈朦朧美〉を分析し評価した。彼らは中国古典詩と西洋現代詩学という二つの伝統の啓発と圧力の下、漢語詩歌を相対化する視座を得て、新しいイメージリや戯劇性を備えた中国固有の現代詩の創造をめざした。報告では主に何其芳と卞之琳の創作や詩論の考察を通して、新詩の水脈と潜在力を考えてみたい。

[シンポジウム報告者紹介]

◇浅見 洋二 (あさみ・ようじ)

大阪大学人文学研究科教授。1960年生まれ。専門は唐宋期を中心とする中国の詩と詩学。著書に『中国の詩学認識—中世から近世への転換』(創文社、2008年)、『皇帝のいる文学史—中国文学概説』(共著、大阪大学出版会、2015年)、『文選 詩篇』1~6(共著、岩波書店、2018~2019年)、『中国宋代文学の圏域—草稿と言論統制』(研文出版、2019年)、『陸游 新釈漢文大系詩人編12』(明治書院、2022年)など。

◇林 少陽 (りん・しょうよう)

マカオ大学歴史学科教授。著書に『「修辞」という思想:章炳麟と漢字圏の言語論的批評理論』(2009)、『「文」與日本學術思想—漢字圏・1700-1990』(2012)、『鼎革以文:清季革命與章太炎復古的新文化運動』(2018)などがある。

◇石川 禎浩 (いしかわ・よしひろ)

京都大学人文科学研究所教授。1963年山形県生まれ、京都大学博士(文学)。神戸大学文学部助教授、京都大学人文科学研究所助教授、准教授を経て、2013年より現職。著書に『中国共産党成立史』(岩波書店、2001年)、『赤い星は如何にして昇ったか—知られざる毛沢東の初期イメージ』(臨川書店、2016年)など、近著『中国共産党、その百年』(筑摩書房、2021年)で、第33回アジア・太平洋賞特別賞、第25回司馬遼太郎賞を受賞。

◇大木 康 (おおき・やすし)

東京大学東洋文化研究所教授。1959年生まれ。専門は中国明清時代文学。著書に『馮夢龍『山歌』の研究』(勁草書房、2003年)、『明末江南の出版文化』(研文出版、2004年)、『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』(汲古書院、2010年)、『蘇州花街散歩 山塘街の物語』(汲古書院、2017年)、『馮夢龍と明末俗文学』(汲古書院、2018年)、『明清江南社会文化史研究』(汲古書院、2020年)、『明清戯曲俗曲雑考』(復旦大学出版社、2021年)、『晚明風雅』(香港城市大学出版社、2022年)ほか。

◇遠藤 星希 (えんどう・せいき)

法政大学文学部准教授。専門は中国古典文学・日本漢文学。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士(文学)。主な論文に「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」(『日本中国学会報』第65集、2013年)、「月の「徘徊」が意味するもの—李白「月下独酌」を中心として」(石川忠久先生星寿記念論文集刊行会編『菊を採る東籬の下 石川忠久先生星寿記念論文集』所収、汲古書院、2021年)、「杜甫の詩における「山河」の在り方とその変質について—安史の乱の前後を中心に」(『杜甫研究年報』第6号、2023年)など。

◇佐藤 普美子 (さとう・ふみこ)

駒澤大学総合教育研究部教授。専門は中国現代文学、とくに現代詩。著書に『彼此往来の詩学—馮至と中国現代詩学』(汲古書院、2011年)、論文に「馮至の「異郷」—散文集『山水』を中心に」(『日本中国学会報』第72号、2020年)、「陳育虹が奏でる〈交ぜ織り〉の響き—サッフォー・李清照への応答」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第40号、2021年)などがある。